

2025 年度
高校生国際協力実体験プログラム
報 告 書

2025 年（令和 7 年）

7 月 24 日～7 月 25 日



独立行政法人国際協力機構
九州センター（JICA 九州）

<目 次>

1.	はじめに	1
2.	高校生国際協力実体験プログラム報告	
	【第1日目：7月24日（木）】	
	開会式	3
	学校紹介・アイスブレイク	4
	国際協力模擬体験	6
	JICA 研修員との交流会	10
	夕食交流会	13
	【第2日目：7月25日（金）】	
	国際協力模擬体験グループ発表	15
	全体振り返り	17
	閉会式	19
	【事後学習】	
	事後学習実践事例	20
3.	添付資料	
	参加校一覧	22
	スタッフ一覧	23
	アンケート集計結果	24
	募集要項	33
	応募用紙	37

1.はじめに

【事業の概要】

JICA九州は1996年より、九州の高校生を対象に開発途上国への理解を深めることを目的とした「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今年度で第29回目を迎えた。これまで、多くの高校生が国際協力について学び、現地の課題や国際社会との関わりを感じる機会を提供してきた。今年度は九州7県34校からの応募があり、書類選考を経て、次の7校が選ばれ、計34名（生徒27名、教員7名）が本プログラムに参加した。

今年度は、8月20日から22日かけて横浜で開催された第9回アフリカ開発会議（TICAD9）^{*}に因み、九州の大学院で学ぶアフリカ出身のJICA研修員を交え、アフリカに焦点を当てた国際協力をテーマにプログラムを展開した。

※第9回アフリカ開発会議（TICAD9）：アフリカの開発をテーマとする国際会議で、第9回は2025年8月20日～22日に横浜で開催された。1993年以来、日本政府が主導し、国連、国連開発計画（UNDP）、世界銀行及びアフリカ連合委員会（AUC）と共同で開催している。

【2025年度参加校】

- ・福岡県 九州国際大学附属高等学校
- ・佐賀県 佐賀県立佐賀商業高等学校
- ・長崎県 長崎県立上五島高等学校
- ・熊本県 熊本県立水俣高等学校
- ・大分県 大分県立大分舞鶴高等学校
- ・宮崎県 宮崎県立延岡高等学校
- ・鹿児島県 鹿児島県立曾於高等学校

参加生徒27名の学年内訳は、1年生2名、2年生17名、3年生8名だった。異なる学校間や学年間で互いに意見を交わしながら学びを深めることもこのプログラムの特色のひとつとなっている。

【プログラム内容】

本プログラム実施前に、各高校で事前学習を行った。事前学習では、各県の国際協力推進員が参加校を訪問し、プログラムの目的や意義、JICA の事業紹介や JICA 海外協力隊について説明した。また、国際協力模擬体験のアクティビティや JICA 研修員との交流に向けて、事前に準備すべき事項や課題を提示することで、当日の議論を活発に、また、円滑に進めるための工夫を行った。

プログラムは 2 日間にわたり行われ、初日の午前中は参加生徒同士の緊張をほぐし、グループワークをするための準備を整えた。午後からは国際協力模擬体験を含むワークショップやアクティビティを以下の通り行った。また、JICA 研修員との親睦を深めるための夕食交流会の時間を設けた。

プログラム 2 日目は、前日の学びを発展させ、グループ活動を通じて国際協力の実践的な理解を深めた。最後は本プログラムの全体の振り返りを行い、各アクティビティで生徒自身がそれぞれ感じた思いや気づき、学びを共有し、今後の進路やキャリアについて考える機会を設けた。

◆第 1 日目：7 月 24 日（木）

- ・開会式
- ・学校紹介・アイスブレイク
- ・国際協力模擬体験（JICA 海外協力隊の活動計画づくり）
- ・JICA 研修員との交流会
- ・国際協力模擬体験（JICA 海外協力隊の活動計画づくり）
- ・夕食交流会

◆第 2 日目：7 月 25 日（金）

- ・国際協力模擬体験グループ発表
- ・全体振り返り
- ・閉会式

2 日間のプログラムを通じて、参加生徒は異文化理解の重要性や国際協力の現場が直面する課題について自分事として考え、活発な意見交換を行った。また、JICA 職員や JICA 研修員、JICA 海外協力隊の経験者や他校の生徒から多様な価値観や考え方に触れる機会を得た。参加生徒はこの経験を通じて得た知識や気づきを活かし、今後も国際的な視野を広げながら、日本国内外を含むさまざまな場面で積極的に行動していくことが期待される。

2. 高校生国際協力実体験プログラム報告

■開会式■

(1) ねらい

- ・ 開会式で、プログラムの目的や意義を明確にし、参加生徒の意識の高まり、主体的な学びを促す。
- ・ 国際協力の重要性についての理解を深め、プログラムに対する動機付けを行う。

(2) 概要

「高校生国際協力実体験プログラム 2025」を開催するにあたり、JICA 九州・後藤光所長が開会の挨拶を行った。本プログラムの意義を説明した後、「プログラムで得た気づきや学びを深めてほしい」と参加生徒への期待を述べた。開会挨拶後、2日間を共に過ごす九州各県の国際協力推進員7名が挨拶を行った。この開会式を経て、参加生徒はプログラムへの意欲を高め、2日間のプログラムに取り組む心構えを得た。



(後藤所長による開会挨拶)



(国際協力推進員の自己紹介)

■学校紹介・アイスブレイク■

(1) ねらい

- ・ 学校紹介を通じて、参加生徒同士が各参加校の特色や活動、相違点や相似点を知るとともに、参加生徒の背景について理解を深める。
- ・ アイスブレイクを通じて互いの距離を縮め、以降のプログラムに積極的に取り組むための空気づくりを行う。

(2) 概要

【学校紹介】

参加校ごとに学校紹介を行い、それぞれの学校の特色や活動について発表した。参加生徒は互いの学校について知るきっかけとなり、交流をより活発にする準備ができた。

【アイスブレイク】

各自が「呼ばれたい名前」を書いた名札をつくり、体を動かすアクティビティ（じゃんけん列車）で自己紹介を行った。サンバ調の音楽を流し、音楽に合わせてアクティビティを行ったこともあり、参加生徒がリラックスし、スムーズに交流に入ることが出来た。

そのほか、国際協力に関するテーマを取り入れたインプロビゼーション[※]を実施した。参加生徒全員で「JICA 海外協力隊」というお題に挑戦した。これらの活動を通じて、異なる学校の参加生徒同士が自然に会話を始めるきっかけとなり、プログラムへの参加意識が高まった。

※インプロビゼーション：出されたお題について1人1文ずつ「あいうえお」に沿って作文して繋げていく即興劇。

(3) 参加生徒の様子と声

初対面の参加生徒同士が緊張した雰囲気の中で活動が始まったが、アップテンポなBGMや身体を動かすゲームを通じて、次第に自然な形で交流が生まれた。単なる自己紹介にとどまらず、活動を媒介とするコミュニケーションが心理的なハードルを下げた様子であった。アイスブレイク後の昼食では、すでに生徒同士が打ち解けた様子で雑談をしながら食事を楽しむ様子がみられた。以下は参加生徒の声。

- ・ 同じ高校の人たちでまとまりがちだったけど、アイスブレイクのおかげで他の県の人と話すきっかけとなりました。
- ・ サンバ調の音楽が面白かった。

- ・「あいうえお」と話を繋げていくアクティビティで、私の番ではなくても私だったらこんな風に言うかなと考えて、他の人の答えを聞いたときに、そんな言葉もあるね、となって楽しかった。じゃんけん列車のアクティビティで自己紹介をしてお題に沿って相手のことを知れて楽しかった。少ししか自己紹介で話せなかった人でも、移動中に声をかけてくれる人もいて話を膨らますことができました。
- ・アクティビティを通して緊張をほぐすことができ、たくさんの人と交流をすることができました。体を動かしながらしたことにより緊張をほぐすことができたことに加えて、昼食も一緒にとったことにより壁を無くして関わるすることができました。



(学校紹介の様子①)



(学校紹介の様子②)



(アイスブレイクの様子①)



(アイスブレイクの様子②)

■国際協力模擬体験■

(1) ねらい

- ・ JICA 海外協力隊の活動を疑似体験し、国際協力の課題解決のプロセスを学ぶ。
- ・ 異なる視点を持つ仲間と協力しながら、社会課題の本質を探り、持続可能な解決策を考える力を養う。
- ・ 考えを整理し、他者に分かりやすく伝えるプレゼンテーション能力を向上させる。
- ・ TICAD9 開催年の機会にアフリカの現状について興味関心を高める。

(2) 概要

【設定】

仮想のダホメ国ポポ村（以下、ポポ村）でコミュニティ開発隊員として派遣される設定で、国の情報から現地の課題や問題点を洗い出し、グループに分かれ2年間の活動計画を立てる。活動内容の要請は「現地の伝統や文化を尊重しながら、ともにより良い村づくりに協力すること」である。なお、ダホメ国は仮想の国として紹介しているが、状況設定のベースとなっているのはアフリカのベナン共和国である。

【導入】

プログラム全体の説明を行い、「JICA 海外協力隊とは」「職種（コミュニティ開発）について」「発表ルール」「評価項目」について説明した。活動計画として考える内容は、対象者や協力者、村の現状や活動内容に加え、将来の村のイメージを考えながら計画することとした。活動計画を作成する上での考慮事項として、「実現可能性」「妥当性」「持続性」「独自性」をあげ、この4つの観点が翌日に行われる計画発表の評価項目となることを伝えた。また計画発表のプレゼンテーション対象者はポポ村の村人に対して行うことを合わせて伝えた。

【村の情報収集、課題抽出、優先順位づけ】

参加生徒は、自分たちが JICA 海外協力隊員として派遣されるポポ村の概要が記載された文書を読み、次にポポ村の詳細を把握するためフィールド調査を行った。会場では国際協力推進員が扮するポポ村の住民たちが、写真を使って村の医療施設や学校、農作物などの生計手段について説明した。それぞれの写真から村の様子を想像し、イメージを膨らませながら、国際協力推進員が扮するポポ村の住民にヒアリングを行った。住民へのヒアリング結果やポポ村の写真から得られた気づきをグループ内で共有した。

続いて、活動計画の課題設定を行った。グループ内では、まず、課題事項の優先順位をつけ、それぞれの課題を解決するためのアイデアを出し合った。また、フィールド調査で発見した良いところをさらに良くするためのアイデア出しを行った。その後、ワー

ルドカフェ方式*を用いて、グループ内だけでなくグループ間でも情報共有を行い、各グループが取り組む分野を設定した。ワールドカフェ方式で情報共有を行ったことで、ポポ村の現状理解を深め、課題や解決策を考える気づきやヒントを得ることができた。

計画がまとまった後は、模造紙を用いて発表に向けて、グループメンバーで役割分担を行い、発表内容の整理やプレゼンテーションの準備を進めた。

※ワールドカフェ：少人数に分かれたテーブルで自由に対話し、他のテーブルとメンバーを交替して対話を続け、結果として参加した全員の意見や知識を集めることができる手法。参加者全員が意見を交わしてお互いの理解を深め、新たな気づきを得ることができる。

【活動計画作成】

「活動計画名」「対象者」「協力者」「村の現状」「活動内容」「目指す村の将来のイメージ」について、各グループ内でディスカッションをしながら計画作成を進めた。

【JICA 在外事務所（企画調査員）の配置】

JICA 海外協力隊の良き相談相手として、ボランティア活動のサポートをする企画調査員を配置した。JICA 九州職員 2 名が、生徒の活動計画作成に関する質疑に対応した。

参加生徒は、写真から得た情報やポポ村の村人役になりきった国際協力推進員との対話を通じて、課題の背景や現状を把握するための調査活動を行った。参加生徒は、質問内容を自ら考え情報を整理する過程に難しさを感じながらも、現実社会に存在する課題の複雑性を実感し、思考を深めていった。この調査やヒアリングによって得られた情報を整理し、課題を抽出したうえで、解決に向けた計画立案を行った。

課題の優先順位付けや持続可能性の観点が求められ、議論は活発に行われた。JICA 九州職員や他校生徒とのやり取りを通じ、視点の不足や論点の整理不足に気づくなど、多くの学びが得られた。

（3）参加生徒の様子と声

参加生徒は、村人役（国際協力推進員）へのインタビューに難しさを感じながらも、試行錯誤をしながら熱心に聞き取り調査を行っていた。村の概略が書かれている紙を読むだけでは分からない、村人が抱える思いを聞き取ったり、写真から推察される特徴を想像したりと、ポポ村の具体像を膨らませていった。以下は参加生徒の声。

- ・ 推進員が村人になりきっていて、自分が本当に現地で調査している感じが楽しかった。
- ・ ポポ村の設定がとてもしっかりしていて現実的な課題を探ることができた。学校、病院、役所、農民など分野ごとに課題が異なるため、解決策を出すのが難しかった。話し

合いのし甲斐があった。

- ・ 紙のテキストだけでなく、情報を持つ人(役を演じている人)に実際に話しかけ自ら欲しい情報を手に入れるということはとても面白かった。人から教えてもらう全くまとまっていない多くの情報に共通事項を見つけ、分類することも面白かった。
- ・ リアルな村人を推進員が演じてくれたおかげで、没入感があり、活動計画などを考えやすかった。また初対面でもコミュニケーションをしっかりとれたおかげで分担して効率よく聞くことができた。
- ・ いろんな職業の人に今抱えている課題を聞いた。日本では考えられない様々な問題があって広い視野を持たなければならないと思った。

計画策定の段階では、参加生徒自身が集めた情報を各自持ち寄り、グループごとに課題を絞り込む作業を行った。それぞれのグループからは、「テーマを1つに絞るのは難しい」とか、「何が問題かはっきりさせて具体的にどう解決するか」など活発に意見を交わす声が聞こえた。以下は参加生徒の声。

- ・ すごく繊細なところまで深く考えなければいけないことに改めて気づき、あまり技術などが発達していない国とかでは材料や手法から考えるのが大変だった。
- ・ 考えているイメージを言葉にして聞く人が分かりやすい構成で紙に示していく過程が難しかったです。
- ・ 計画を考える上で2年という短い期間設定やJICAの人がいなくなっても村人だけでやっていけるかなど様々な課題があり、とても難しかった。それでもチームのみんなとどうしたら村人の生活が良くなるかアイデアを出し、計画を立てていくことができた。
- ・ 事前学習で学んだことを生かして情報の広げ方など様々な部分でスムーズに物事を進めることができました。
- ・ 課題や解決策を考えれば考えるほど悩んで難しかった。班のみんなで意見を出し合っただけで考えが深まっていくのが楽しかった。
- ・ 今まで調べるときはインターネットしか使っていなかったけれど、図書館に行ってJICAの雑誌みたいなものを読んで調べた。
- ・ 課題が多すぎて、何から手を付けて良いのか分からなかった。ただ、お金がないと何もよくできないと思ったので、農業を優先にしたが、人命や村の組織の問題も深刻で正しかったのかは分からない。
- ・ 結果的に何がポポ村の人々にとって必要なのかを考えながら、具体的な政策を考えましたが、それが本当に実行できて村の改善になるかの判断がとっても難しくて1日目は頭がこんがらがってしまった。



(「ポポ村の概要」を確認している様子)



(フィールド調査の様子)



(フィールド調査の様子)



(活動計画策定の様子)

■JICA 研修員との交流会■

(1) ねらい

- ・ JICA 研修員の母国での仕事や日本で学んでいることについて、JICA 研修員にインタビューすることで、それぞれの JICA 研修員のキャリアやアフリカの現状に触れ、参加生徒自身のキャリア形成について考える機会とする。
- ・ 日本や住んでいる地域の魅力、自分のことを英語で伝える経験を通じて、海外の方に発信するコミュニケーション力を高める。
- ・ 異文化交流の場で、グループ内でお互いに助け合いながらコミュニケーションを図ることで、相互理解と信頼を築くスキルを養う。
- ・ 日本・アフリカ・ユースキャンプ*の一環としてアフリカの現状の一端を知る。

※日本・アフリカ・ユースキャンプ：TICAD9 開催に関連し実施された、日本とアフリカの若者たちによる交流事業

(2) 概要

アフリカ 6 か国出身の JICA 研修員 1 名～2 名が生徒のグループに入り、それぞれ自己紹介や母国について説明した。参加生徒は、国際協力模擬体験の参考とするため、JICA 研修員に対してインタビューを行い、自分たちが計画している模擬体験のテーマや疑問についてディスカッションを行った。

JICA 研修員の母国の文化や価値観について直接話を聞くことで、参加生徒は異文化理解を深めるとともに、自分の意見を発信する実践的な英語でのコミュニケーションの機会を得た。また、参加生徒同士で協力しながら JICA 研修員との対話を進めることで、互いに助け合う姿勢も生まれ、各自が研修員の話をもっとよく理解することができた。英語によるコミュニケーションに最初は不安の声が上がっていたが、実際に対話を行うなかで、伝わる喜びや理解できた達成感が生まれ、参加生徒の自信につながった。言語だけでなくジェスチャーや例示による工夫が効果的であることを体験的に学ぶ機会ともなった。

【参加した JICA 研修員】

JICA 研修員 9 名

出身国：コンゴ民主共和国、ガボン、ケニア、リベリア、モザンビーク、ナイジェリア

在籍大学：長崎大学、佐賀大学、立命館アジア太平洋大学

(3) 参加生徒の様子と声

初めは JICA 研修員の話聞き取るのが難しく、うまく会話できないもどかしさがみえる場面も見受けられたが、徐々に自分の知っている単語やジェスチャーで思いや考えを伝えるようになった。参加生徒自身の言葉で JICA 研修員に考えが伝わった際は笑顔も見られ、伝わる喜びや理解できた達成感が参加者の自信につながった様子だった。以下は参加生徒の声。

- ・ アフリカ出身の方々の話を聞くことができ自分たちの計画していた案を改善することができた。
- ・ 正直に言うと自分の英語力の低さを改めて自覚できた。ですが、とても良い刺激になりました。アフリカの研修員たちからのアドバイスはすごく現実味のあることを言っていただき感謝の気持ちになりました。
- ・ 私は英語がとても苦手だが、一生懸命聞き取ろうとしたら研修員の方々がゆっくりとかみ砕いて話してくださって本当に嬉しかった。研修員さんの大学の研究についても話をしてもらい知ることができて本当に勉強になった。
- ・ JICA 研修員の方の話を聞いて英語でコミュニケーションをとることが難しかったけれど、ジェスチャーだったり JICA 研修員のちょっとした日本語で交流ができて良かった。
- ・ 英語をたくさん聞いて、どう伝えようと考えて疲れた。自分の単語力が足りないと感じた。英語が出てこなくて自分の気持ちが十分に伝えられず、悔しかったが英語を使うのは楽しいと感じた。



(JICA 研修員の挨拶)



(生徒の自己紹介)



(生徒が JICA 研修員を紹介している様子)



(JICA 研修員へインタビュー)



(JICA 研修員との集合写真)

■夕食交流会■

(1) ねらい

- ・ JICA 研修員と食事をしながらの交流を通して異文化への関心と理解を深める。
- ・ JICA 研修員との対話を通じて、異文化間の相互理解を築く力を身につける。

(2) 概要

参加生徒は 7 グループに分かれ、JICA 研修員 1 名が各グループに入り食事会を行った。メニューには北アフリカでよく食されるクスクスなどが取り入れてあり、初めての食べ物を経験して、お互いに国の文化や食べ物について話し合ったり、国際交流の楽しさを体験した。参加生徒は会話を通して異文化への関心が高まり、今後の学びや学校生活に活かせるような経験を得ることができた。

【参加した JICA 研修員】

JICA 研修員 9 名

出身国：コンゴ民主共和国、ガボン、ケニア、リベリア、モザンビーク、ナイジェリア

在籍大学：長崎大学、佐賀大学、立命館アジア太平洋大学

(3) 参加生徒の様子と声

食事をしながら JICA 研修員と交流することで、より自然な形で関係づくりが進んだ様子だった。それぞれの国の食べ物の話など話題が多岐に広げられたので、冗談を言いあい、笑い、くつろいだ雰囲気でも楽しんでいた。また、出身国の文化や課題についての話をじっくり聞くことができる時間ともなった。以下は参加生徒の声。

- ・ 夕食で自分の英語が通じて英語を使ったコミュニケーションの楽しさを知った。
- ・ 夕食のとき私が冗談を言って、一緒に笑えたことが本当にうれしかった。
- ・ 夕食が美味しく、研修員さんたちとたくさんおしゃべりできて楽しかった。班の人との仲も深まった。
- ・ アフリカの問題などを詳しく教えてくれて楽しかったし、学びになりました。
- ・ 海外のご飯は不安だったけれどおいしくて良かった。
- ・ 英語を介してどうにかこうにか JICA 研修員さんの故郷の話や日本に来た理由、現在の話を教えてもらえて印象に残った。



(夕食交流会のグループ①)



(夕食交流会のグループ②)



(夕食交流会のグループ③)



(食事を囲んでの交流)

■国際協力模擬体験 グループ発表■

(1) ねらい

- ・ 参加生徒が自分の考えを整理し、聞く人に分かり易く伝える力を養う。
- ・ 質疑応答や意見交換を通じて、多様な視点からのフィードバックを受け、課題解決に向けた新たな気づきを得る。
- ・ 国際協力の実践における課題や持続可能な解決のポイントを理解し、今後の学びや行動につなげる。

(2) 概要

国際協力模擬体験のグループ発表では、最初に司会が発表と質疑応答の時間配分、発表はポポ村の住民に向けて行われる設定であることなどの注意事項を再度伝え、その後7グループの参加生徒が順番に発表した。

まず、各グループが6分間で課題とその解決策について発表し、その後4分間程度、村人の設定である JICA 研修員や JICA 職員からの質問に答える形でグループ発表を行った。JICA 研修員からは、アフリカ6か国の独自の観点からのコメントや指摘やアドバイスがあり、JICA 職員からは、専門的かつ実践的な視点からの質問やアドバイスがあった。参加生徒は、プログラム中インタビューして聞き取った事柄や取り組んだ課題について、JICA 研修員や JICA 職員からの的確なフィードバックをもらったことで、より課題の理解を深めた様子だった。また、他のチームの発表を聞くことで新たな発想に刺激を受けるなど、相互学習の効果も大きかった。

(3) 参加生徒の様子と声

参加生徒ははじめ緊張した様子であったが、発表の際は堂々とグループで考えた活動計画を発表した。発表内容は通訳を介して JICA 研修員にも逐次伝えられた。JICA 研修員は、アフリカ出身だからこそ回答できるコメントやアドバイスを参加生徒に伝えた。JICA 研修員からのコメントを受けると、生徒は新しい気づきにハッとしたり、何度も頷いたりして理解した様子であった。以下は参加生徒の声。

- ・ とても緊張してうまく話すことができなかつたけど、自分たちの意見を時間内でアピールすることができたと思う。伝えたいことが伝えきれなかつたので、もう少し大切な所だけを話せるようにすればよかつたと思った。
- ・ 他の班の発表はどこもクオリティが高く、感心した。JICA 研修員からのアドバイスがとっても的確だつた。
- ・ 前日の作業を改めて時間をおいて考えることでまた新しい視点からの発見などが見つかり、より深め合う時間となりました。また、他のグループの発表を聞き、視野を広

くすることが大事だなと思いました。

- ・ 将来も持続させる方法を考えていたけれど、発表の際は抜けてしまっていて、JICA 研修員の方に持続可能ではないと指摘された。自分たちが考えていたことを十分に発表で伝えられなかったことが悔しかった。他の班の発表も聞けて楽しかった。色々なアプローチの仕方があり、アイデアがあり面白いと思った。考えていることをうまく表現することは難しいと思った。



(発表準備の様子)



(グループ発表)



(JICA 研修員からのフィードバック)



(JICA 研修員からのフィードバック)

■全体振り返り■

(1) ねらい

- ・ 2日間のプログラム全体を振り返ることで学びを整理し、国際協力に対する自分の考えをまとめる。
- ・ 今後の将来のキャリア（生き方）について考えるきっかけとする。

(2) 概要

全体振り返りの時間では、2日間の活動について、参加生徒自身が行動したこととその時の感情を整理する時間を設けた。プログラムのなかで「事前学習」「アイスブレイク」「国際協力模擬体験の計画作り」「JICA 研修員との交流会」「グループ発表」「その他」のそれぞれについて考えるようにした。

はじめに、個人での作業として、2日間の活動を振り返り、行動や思いを付箋に書き出した。それを「行動の振り返り」と「感情（気持ち）の振り返り」に分けて、参加学校ごとに整理して模造紙に貼り付け、ホワイトボードに掲示した。国際協力推進員は自身の担当県の高校生グループに入り、生徒主体で作業が進むようサポートを行い、各校の教員も生徒を見守りながら適宜支援した。

続いて、「気づきの共有」ワークを行った。参加生徒各自がペンを持ち、それぞれの学校ごとに模造紙に記述された意見を順番に読んでいき、自分と同じ意見には「☆」、素敵だと感じた意見には「♡」、新たな視点だと感じた意見には「◎」のマークを付け、多様な考えや価値観への共感を可視化した。

その後、本プログラムで学んだことや感じたことを踏まえ、今後の中・長期的な目標を考える時間を設けた。「目標シート」の記入を個人ワークとして実施し、身の回りのできる行動や今後の目標について考えた。すべてを当日中に書きあげる必要はなく、今後も時間をかけて考えていくことを前提として継続的なワークとなるようにした。

最後に、各学校の引率教員が参加生徒に対し、2日間の取組み姿勢や活動の様子、活動の成果、今後の展望、期待することなどの感想を発表した。

(3) 参加生徒の様子と声

参加生徒は、自分が感じていたことを他の生徒も同じように感じていたことへの「共感」や、一人では得られなかった新たな「発見」があった様子だった。以下は参加生徒の声。

- ・ 2日間で行ったことを振り返ると、思っていたより様々な活動をして、その中で、感じていた気持ちが様々あり、この2日間でいろんな感情が湧き出ていたんだなと考えることができた。

- ・ 同じ班の意見を聞いたうえで他の班の感想などを見て、共感するところや新発見があることがあったので、自分の気付かなかったところを知ることができてとても良かったです。
- ・ JICA 海外協力隊の活動内容をすべてではないけれど、身をもって体験することができてとても貴重な経験になった。JICA 研修員さん、他校の人たちから良い刺激をもらい、この体験を通して自分が少し成長できたと思い、うれしい。
- ・ 付箋をつけ合うのが楽しかったです。様々な視点があっっておもしろかった。
- ・ 県を越えていろんな人と仲良くなれた。たくさんの人と話すことで広い視野を持つことができた。
- ・ 他県の人たちも同じような感想をもっていることに気が付いた。最後だと思うとちょっと名残惜しかった。
- ・ 他校の感想や想いを知ることができ、とても勉強になりました。普段他校の生徒と関わることがないので、とても刺激的で成長できました。
- ・ 他の学校の人と関わりながら、実際にある課題について真剣に話すことができて新しい発見ができたし、もっと学ばないといけないと思った。



(振り返りの様子)



(振り返りの様子)



(全体共有の時間でマークを書く様子)



(先生からの感想発表)

■閉会式■

(1) ねらい

- ・ プログラムで得た経験を今後の活動や学びへとつなげる意識を高め、プログラム参加生徒同士や出会った人たちとのつながりを大切に、今後も国際協力への関心を持ち続けるきっかけとする。

(2) 概要

閉会式では、JICA九州の山口尚孝次長が挨拶を行い、プログラムへの参加に対する謝辞とともに、今後の学びや行動への期待を述べた。参加生徒は、2日間の経験を振り返り、プログラムを通じて得た知識や気づきを今後の活動にどう活かしていくかを考える機会とした。

最後に、スタッフを含めた全員で記念写真を撮影し、プログラムの締め括りとした。



(山口次長による閉会挨拶)



(集合写真)

■事後学習実践事例■

2日間のプログラムを通じて得た学びを継続するため、事後の学習として、各学校でさまざまな取り組みが行われた。他の生徒に伝えるために学んだことを整理し、学校の部活動や文化祭で発表を行った学校もあった。以下、事後学習実践事例を一部紹介する。

【福岡県 九州国際大学付属高等学校】

九州国際大学付属高等学校では、2025年10月20日に国際交流部（IEC）の部員に対して高校生国際協力実体験プログラムの報告会とミニワークショップを実施した。

参加した生徒3名から「高校生国際協力実体験プログラム」での参加体験を発表した。発表では、プログラムを通じて学んだ異文化理解に対する重要性や気づきを共有し、他の生徒たちにも国際理解への関心を持ってもらう取り組みとなった。IECの部員約20名に対して国際協力模擬体験のミニワークショップを実施した。5グループがそれぞれ食料、教育、経済、医療分野と様々なテーマで発表を行った。最後は福岡県国際協力推進員が講評を行い、IECの部員の異文化を体験する機会となった。



(プログラムの報告の様子)



(ミニワークショップ)



(活動計画を立てる様子)

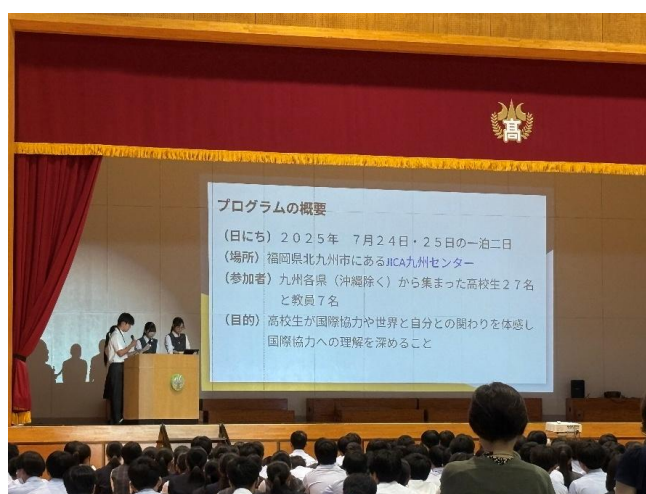


(活動計画発表の様子)

【熊本県 熊本県立水俣高等学校】

熊本県立水俣高等学校では、2025年10月24日に、文化祭の前夜祭「探究活動発表」の時間に同高校の生徒に対して参加した生徒4名から高校生国際協力実体験プログラムの参加体験を発表した。

発表では、「主体性や自分から学び考える力の大きさ」、「国際的な視野を持つことの重要性や課題解決能力を学んだこと」や、「英語でコミュニケーションを取ることの難しさ」など、プログラムを通じて学んだ国際的な視野を持つことの重要性やプログラムで得た学びを共有し、教員を含む他の生徒たちにも国際理解への関心を持ってもらう取り組みとなった。



(文化祭での発表の様子①)



(文化祭での発表の様子②)

3. 添付資料

<参加校一覧>

2025年度 高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

	県	種別	高等学校名	1年	2年	3年	合計
1	福岡	私立	九州国際大学附属高等学校	—	2	1	3
2	佐賀	県立	佐賀商業高等学校	—	—	4	4
3	長崎	県立	上五島高等学校	—	4	—	4
4	熊本	県立	水俣高等学校	—	2	2	4
5	大分	県立	大分舞鶴高等学校	2	2	—	4
6	宮崎	県立	延岡高等学校	—	4	—	4
7	鹿児島	県立	曾於高等学校	—	3	1	4
合計（人）				2	17	8	27

<スタッフ一覧>

2025 年度 高校生国際協力実体験プログラム スタッフ一覧

	所 属	氏 名	JICA 海外協力隊 派遣国	職 種
1	福岡県国際協力推進員	吉原 伸彦	ウガンダ	青少年活動
2	佐賀県国際協力推進員	石川 洸	セネガル	コミュニティ開発
3	長崎県国際協力推進員	小田 智子	パラグアイ	音楽
4	熊本県国際協力推進員	尾上 香織	トンガ	音楽
5	大分県国際協力推進員	渡邊 了孔	モンゴル	視聴覚教育
6	宮崎県国際協力推進員	西村 真由美	—	—
7	鹿児島県国際協力推進員	仮屋 慶一	モルディブ	体育
8	JICA 九州 市民参加協力課	橋口 恵利子	ボリビア エルサルバドル	視聴覚教育 番組制作
9	NPO 九州海外協力協会	赤司 周平	ベナン	食用作物・稲作栽培
10	NPO 九州海外協力協会	岡田 宗子	スリランカ	野菜栽培
11	NPO 九州海外協力協会	宮原 良美	—	—
12	NPO 九州海外協力協会	吉田 祐子	—	—
13	NPO 九州海外協力協会	Bokhtar Bakozade	—	—

アンケート集計結果（参加生徒・教員）

■参加生徒のアンケート（回答者数 27 名：回答率 100%）■

1. 高校生国際協力実体験プログラムの 2 日間を通じての満足度

評価・満足度	人数
5. とても良かった	24
4. 良かった	3
3. 普通	0
2. 悪かった	0
1. とても悪かった	0

評価 5 24 名

理由：

- ・ 同じ文化・言語を共有しているが面識のない高校生と、文化・言語も全く異なる JICA 研修員との交流を重ねながらリアリティ溢れる計画を立てるといふ今まで経験したことのないことを一気に経験するという、とても個人的にはアクティブで満足度の高い 2 日間でした。
- ・ 皆で協力して模造紙に図などを用いてまとめることが楽しかった。何の問題について話し合うのか、どの方法で解決するのかグループの人と話し合うことが楽しかった。日本では問題になることでも、ある地域では死なないからあまり気にしていない、という衛生に気を配らないこともあるのだと知った。
- ・ 始まりから終わりまで、JICA 職員の手厚いサポートがあったから。普段経験できないような体験をすることができたから。
- ・ プログラムのすべてが楽しかったから。英語をつかって話す時間が長かったり、他県の高中生と話したりで新鮮なことが多かったから。
- ・ 国際課題について考えることには学校では限界があり、そのプロフェッショナルである JICA の下でしかできない経験だった。
- ・ 海外に派遣される、という初めての立場で物事を考えることができた。また海外の方や他校の生徒と関わることで、考えの幅が広がった。
- ・ とても楽しかったし、自分の力になったと感じたから。ここでしかできない体験だと思ったから。人の役に立ちたいという思いが強くなった。
- ・ 今までは解決策を提示して終わりという場面が多かったけれど、今回のプログラムを通して解決策を行うためのお金や人手をどうするかなど、より現実的で社会に直結するような考えを計画できてよかった。

- ・ 外国の人と意見を交わすことで、広い視野を持つことができた。
- ・ ごはんもおいしかったし、部屋もきれいで最高の居心地だった。他県の代表と話し合いができて、自分の考えを深めることができた。
- ・ 色々な価値観を持った人と情報交換ができて自分の視野が広がった気がします。そして、英語などを通してアフリカの人と意見交換ができたため。
- ・ 同じ高校の生徒ではなく、他の高校の生徒と班を組んで一緒にプログラムを練っていく中で、様々な意見に触れる事ができて、とても良かったです。また、研修員との交流では、他己紹介など、難しいところもありましたが、交流していく中で「楽しい」という気持ちに変わってとても嬉しかったです。
- ・ 自分自身このような大きな活動に参加するのは初めてで、かつ、自分がとても興味のある分野だったので、さらに興味をひきつけられるものと出会えたからです。
- ・ 英語をもっと学び、色んな国の人と円滑に会話できるようになりたいと思ったから。他校の人と話して、自分にはない新しい考え方を知ることができたから。
- ・ JICA 海外協力隊の活動内容を、実際に計画を立てて発表する中で、深く知れて、楽しさや大変さを体験できたから。
- ・ 私たちは離島に住んでいてあまり他の学校の人と関わることがないため、とても貴重な経験になった。ポポ村の課題解決を通して、課題解決能力の視点を研修員の方やグループの人のおかげで知ることができたため、これからの探究活動に活かそうと思う。
- ・ 班活動が多くあったから。他校の生徒と関わったから。多くの外国の方と会話できたから。
- ・ いつも考えてない分野を深く考える経験が自分の幅を広げてくれたから。
- ・ 問題解決案を考えるのが楽しかったです。
- ・ アフリカの方と英語で話したり、英語で話す機会がとても楽しかった。社会人になったら JICA に挑戦したいです。
- ・ 自分にとって初めてのプログラム参加でとても緊張したし、英語が難しかったです。その分学ぶことが沢山あったので幸せでした。
- ・ ポポ村のことについて一生懸命考えることができてよかった。
- ・ 初対面の人とも親交を深めつつ、ポポ村の課題解決について真剣に考えることができた。
- ・ 普段経験できない体験を自分から申し込んで動き出せてよかった。

評価 4 3名

理由：

- ・ 問題点を1つの視点からではなく、様々な視点から見ることによって、見え方が変わり、自分自身の考えを深めることができました。国際協力についての理解も深めることができたので良かったです。
- ・ 国際協力模擬体験で、貧しい国の現状についてはこれまでに知っていることはあったけれど、それをどう改善していくかを具体的に中々考えないし、それを同じ年代の人たちと話して意見をまとめるのはいい経験になったため。
- ・ とても有意義な1泊2日のプログラムでした。個人的にもっと班のメンバーと意見を交わしたかったな、と思いました。

2. 2日間で一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。

【アイスブレイク】

- ・ 今までしたことのない、皆でまとまってする感じがとても気持ちよかった。

【国際協力模擬体験（アクティビティ）】

- ・ 異なる価値観を持った人と相手の意見に感心しながら、1つの結果をまとめとして出すプロセスがとてもいい経験だと思ったから。
- ・ ここまで海外の問題について本気で考えるのは初めてで、新しい視野が広がったから。班員と協力して解決策を考えることが楽しかった。
- ・ グループメンバーや27人全員が真剣に向き合って取り組んでいたこと。課題を解決するという場で全員が熱意を持てることは中々ないことだと思うから。
- ・ 今回は「ポポ村」という村についてだけ調べたが、村の現状が一番驚きました。思っていたよりも過酷な環境なところもあって、でも、村人たちは温かい人で、など、すべてが悪いというわけではなかった部分も印象に残りました。
- ・ 班でポポ村について話し合ったことです。外国の方のアドバイスを含めて、自分達で情報を集めながら考えを深めていくことがとても楽しかったため。

【JICA 研修員との交流プログラム】

- ・ JICA 研修員との交流がとても印象に残りました。理由としては、外国の方々との交流の場がとても貴重で自分自身の英語のスキルの低さを痛感することができたからです。
- ・ 自分の英語のできなさに気が付いたから。

- ・ なまり、英語のレベル、考え方の違いが大きすぎて、とても強い衝撃を受けました。
- ・ 研修員との交流が少ない中でコミュニケーションを多くとれたことがうれしかったし、前より自分の英語能力が上がっているのを実感して自信にもなりました。また、英語しかコミュニケーションできる言語がないからこそ何とかして伝えようという気持ちが大きく、伝わった時の感動が大きかったです。
- ・ アフリカの問題などを詳しく教えてくれたり、解決策を一緒に考えたり、楽しかったし、学びになりました。
- ・ 現地のことをテレビより詳しく教えてくれた。自分の英語力の低さを強く実感した。
- ・ 研修員の方々とお話ししていく中で、その国の特徴や食べ物、その国の問題を知って、活動に活かすことが出来ました。話していく中で、たくさんの意見に触れることができ、自分の考え+相手の考えで、楽しかったです。
- ・ 英語が全然わからなくて難しかったが、話が通じなくても笑いが起こったりして楽しかったから。
- ・ 研修員の方々と自己紹介や、大学での研究を英語で話したことが印象に残りました。英語がどんどん流れてきて聞き取るだけで精一杯だったけれど、話の大部分は理解できて、とても嬉しかったから。また、研修内容がどれもワクワクするもので興味がわいたから。
- ・ 各国の農業について知れたとともに、夢を語り合えてモチベーションが高め合えた。
- ・ 英会話を習っていたとはいえ、そんなに得意ではないのでとても難しいと感じました。他県のスキルも驚きました。
- ・ アフリカ英語を聞くのは初めてだったし、とても難しかったが、英語をもっと真剣に学ぼうと思う、とても良い機会になった。

【国際協力模擬隊体験（アクティビティ）グループ発表】

- ・ たくさんの意見が聞けたから、グループ発表が印象に残った。
- ・ 仲間たちと協力して完成できたのでよかった。

【その他】

- ・ JICA 研修員との夕食です。英語を介して、どうにかこうにか JICA 研修員さんの故郷の話や日本にやってきた理由、現在の話を教えてもらえたからです。異国の話を当人から聞くということで、より現実味がまし、とても面白かったです。

- ・ 通訳者さんのことがすごいなと思いました。日本語から英語に、英語から日本語に素早く訳していて頭の回転が速いと思った。私達が発表しているときは日本語を聞きながら英語にしている、私には、話しながら人が話している内容を理解することは難しいのですすごいなと思った。英語から日本語にしたときは話をまとめて伝えていたので、すごいと思った。
- ・ 班の3人と仲が深まったこと。たくさんの考えを言い合って考えと同時に仲も深まって行って、楽しいし、うれしかった。チームになって協力してチームワークが高まっていくのを感じられた。
- ・ 交流ディナーです。初めて海外の方と食事をしたからです。
- ・ 研修員さんと夕食をとり、会話したことが印象に残っています。自分の英語が通じて、笑いが起こるような会話もできたから。
- ・ 全てです。

3. 今後、学校や個人でどのようなことに取り組みたいですか。

- ・ 海外に目を向けるという大雑把なことをするのではなく、世界的に注目されている国が注目されている理由を見つけ、その理由から世界的な流行を考え、その仮説に従い、情報を集め世界の流行を見つめる。
- ・ 個人としては、将来の夢が教師になることなので、今回の研修を通して得た学びや知識を生徒の皆に伝えていきたいと考えています。また、今回の研修を通して学んだことを活かし、国際協力などの分野についても力を入れていきたいです。
- ・ 国際的なことを学ぶことができたのでクラスだけにとどまらず、全校生徒の前で、感じたことや勉強したことを伝え、JICAが開発途上国にどのような影響を与えているかをアピールして、自分なりの良さをプレゼンやポスターで発見したい。
- ・ 使わなくなった物を必要としている人に寄付をする（体育祭や文化祭の時に呼びかけを行う）。今回学んだことを文化祭の時にステージ発表、またはクラス展示で多くの人に知ってもらい、国際問題について考えてもらう。
- ・ 取り組んでみたいことは、フェアトレードの活動である。まだ高校生では現地に行くことはできないが、フェアトレードをすることによって、日本からでも貢献できると思ったから。
- ・ フェアトレードの商品を仕入れ、売る。
- ・ 今回のプログラムで自分がした行動（分析→発表まで）をすべて学校でもしたい。皆が国際課題に取り組むということの魅力を知ることができると思う。
- ・ 学校で今回の活動を紹介し、実際に体験してほしい。また個人では衣類などの生活用品の寄付など今の自分にできる海外支援をしていきたい。

- ・ 自分が勉強している間も世界では学校に行くことができない、十分な食事を得ることができない人がいるという見えない部分の想像をして、感謝を忘れずに過ごしたい。
- ・ 様々な課題を色んな視点からみて、解決策を考えてみたいです。まずは生徒会での活動に活かします。
- ・ 来年は留学に挑戦して英語力を高めたい。学校で JICA のことを発表したい。
- ・ 将来、実際に国際協力に参加してみたい。人の役に立ちたい。
- ・ JICA の魅力を伝えたい。
- ・ 学んだスキルだったり、社会のことを、知れたことを色々な方法で伝えていきたいと思います。個人では自分のこれまでのことを活かしながら、新しいことに挑戦していきたいです。
- ・ JICA について、もっともっと知りたいと思いました。また、エッセイコンテストも参加してみようかと考えています。
- ・ このプログラムで学んだことを周りの人に伝え、英語や他の国にも興味を持ってもらいたい。自分が経験した、英語を使って会話することの楽しさを広めたい。
- ・ ALT の先生ともっと話してみたい。
- ・ 国際協力について、もっと調べ、学びを深めていきたい。また、外国の方と関わる楽しさを今回のプログラムで知れたから、もっと英語を勉強して外国の方と深く関わり、英語でのコミュニケーションの取り方や相手の国・地域の文化を学んでいきたい。
- ・ ALT の先生に、もっと積極的に話しかけていきたいです。また、視野を広げて物事をみることを心掛けたいです。
- ・ 世界のために自分ができることを本気で考えたい。
- ・ JICA での活動を発表したいです。英語を学びたいです。
- ・ 全校のみんなに伝えたり、部活の中でもワークショップの内容に取り組みたいです。個人では、英検準一級をとって英語を使った仕事につけるように頑張りたいです。
- ・ 英語力の発達と将来についての想像。夢などを考える。
- ・ JICA について周りの人と共有していきたい。
- ・ 英語をより真剣に学び、英語力をつけること。世界情勢について、関心を持ち、積極的に調べること。
- ・ 恥ずかしがるのをやめて、もっと自分を出していきたい。

■参加教員のアンケート（回答者数7名：回答率100%）■

1. 本プログラムを何で知りましたか。（複数選択可）

- 学校に送られてきた案内：4名
- メールでの案内：0名
- JICA九州HP：1名
- 国際協力推進員に聞いた：0名
- 知人に聞いた：1名
- その他（20年程前に参加経験）：1名

2. 高校生国際協力実体験プログラムの2日間を通じての満足度

- とても良かった（満足）評価5：7名

理由：

- ・ JICA職員の方や推進員の方々に本当に力を尽くしていただき、心強く、有難く思いました。
- ・ 他県の高校生との交流、JICA研修員との交流はとても貴重な経験でした。経験を通してしか得られない成長ができたと思います。生徒たちへの影響は計り知れません。感謝です。
- ・ 英語をあまり使う機会のない生徒たちにとって、良い刺激になったと思います。普段、幼い頃からの知り合いの中でしか人間関係を築くことがない環境のため、九州各県から集まった同年代の人との関わりにも大いに刺激を受けたようです。
- ・ 生徒たちの成長が想像以上だった。たった1泊2日だが、出発前と参加後の表情と目の輝きは大きく違った。このプログラムの意義を今後、校内だけでなく、地域や県全体に波及できるよう発信したい。
- ・ 普段、教室では経験できない活動を味わえる機会となりました。特に実際にアフリカの方々と英語で意見交換できるようなチャンスは中々ないため、とても良かったと思います。
- ・ 各活動のねらいがはっきりと生徒に伝わり、手順も丁寧に伝えられていた。
- ・ ここまでのプログラムをこれまでのバックアップで実現できるのはこのプログラムだけだと思います。現任校は小規模なクラス編成ですので、九州圏から様々な高校生と交流を持てるだけでも多くの収穫があったといえます。これからも多くの高校がこの機会を得られますようお願いします。

3. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか。

□適切だった：6名

理由：

- ・ 2日目の開始をもう少し早くして、生徒の昼食時間を確保できるようにしてはどうでしょうか。初日も、できれば荷物を部屋におく余裕のある設定だとありがたいです。
- ・ 大部分は適切だったと思います。2日目の昼休みは発表準備も昼食も…と少しバタバタしたところもあったかなと思いました。(11:30-12:20が昼休みで、高校生のJICAFe利用が12時過ぎてからのところが多かったため)
- ・ とてもスムーズな流れで良く計画された時間配分だったと感心した。
- ・ 良く練り上げられたプログラムで素晴らしいと感じましたが、2点注文させて下さい。(1)研修のスケジュールは分かりますが、発表までのプロセスの概略が分かるとより生徒たちの目標がはっきりすると思います。(2)15時~16時の間で30分くらいの長めの休憩があると安心です。(宿泊棟に行っていない学校はこのタイミングで一度部屋入りできるといいと思います。)

□適切ではなかった：1名

- ・ 仮想の案件をグループ毎に検討するのはとてもおもしろい企画でしたが、研修生が入れ代わり立ち代わりの時間が短すぎて、情報が多すぎて生徒は飽和している感がありました。

4. 今後、事後学習として取り組みたいこと、生徒の皆さんと進めていきたいことをご記入ください。

- ・ 国際協力模擬体験を部活動(国際交流部)内で再現したかったのですが、推進員の方々が扮したような役割をするのが難しいかと思いました。まず、今回の活動を発表させて国際協力を身近なものとして考えてもらえるようにしたいです。
- ・ 生徒にはエッセイコンテストに向けてエッセイを書いてもらおうと思います。文化祭または校内のプレゼンテーション大会での発表も考えています。
- ・ 文化祭や学校の集会などでの発表や、ポスター等を作成し掲示するなどができれば良いと思っています。
- ・ 校内(文化祭、成果発表会)での発表や校外での発表の機会を得たいと考えている。JICAのプログラム(出前講座やその他)を活用したい。
- ・ 以前、「貿易ゲーム」をお教えいただいたことがあります。これを取り入れてもよいかとも思いました。

- ・ エッセイコンテスト応募、まとめ動画作成、フェアトレード製品の販売、研究発表、等を予定しています。
- ・ 紹介いただいた出前講座等を組み合わせて、10月の文化祭での発表を一里塚として考えていきます。現プログラム終了時ではまだ分かりませんが、参加生徒の意識も取り入れつつアイデアをまとめたいです。推進員さんにも相談させていただきたいです。

5. JICAの開発教育/国際理解教育に関する教育支援に対してどのようなことを期待しますか。

- ・ 生徒たちが後で再現しやすいような、または自分たちでもやれるようなワークショップやアクティビティをしていただければありがたいです。
- ・ 学校は（特に公立）費用がかかることを新しく年度途中で計画することが難しいので、講師派遣などについて、コスト面でご考慮いただけるとありがたいです。
- ・ 今回参加して英語を話す機会、経験はとても大切だと思いました。学校で学ぶ英語だけでなく生きた英語を使う経験が多いほど、言語に対する壁も低くなると思うため、今回のような JICA 研修員の方と話す機会がもっとあると良いと思いました。
- ・ もっとこのプログラムの知名度を上げていいと思う。発信を期待する。
- ・ 学校現場と JICA がさらにつながれるよう、こちらも関わりたいと思います。
- ・ 学校現場における開発教育や国際理解教育の必要性や意義は年毎に変化しているとは思いますが、本プログラムのような“対面で”“広地域”から“同年代”が集まる機会を維持して欲しいです。何もかもがコストパフォーマンス重視でデジタルを多用する中で、子ども達の成長は本プログラムのような場でないと見られないことを確信しました。

JICA九州 高校生国際協力 実体験プログラム 2025



開催日 7月24日(木)～25日(金)

応募締切 5月19日(月)

世界と出会い、
未来を創る一歩を
踏み出そう！



主催：独立行政法人 国際協力機構 九州センター
後援：福岡県教育委員会 佐賀県教育委員会 長崎県教育委員会 熊本県教育委員会
大分県教育委員会 宮崎県教育委員会 鹿児島県教育委員会
福岡市教育委員会 北九州市教育委員会 熊本市教育委員会

独立行政法人 国際協力機構



世界・仲間・自分、発見！

九州各地の高校生たちと
世界を感じる2日間！

JICA九州 高校生国際協力実体験プログラムは九州各県から集まった仲間が1泊2日を共にし、世界と自分とのつながりを体感し、学び合う高校生のための国際協力入門講座です。

スケジュール

5/19(月) ○ 応募締切

6/17(火) ○ 選考結果通知(メールにて通知)

6/19(木) ○ 引率教員及び参加生徒の氏名をお知らせください。

6月中旬～
:各種手続き

6月中旬～食事、宿泊、保険契約に必要な参加生徒及び引率教員の情報、また、交通費積算に必要な情報も併せて確認させていただきます。学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します。

6月下旬～7月上旬
:事前学習

九州各県デスクが各校で事前学習を実施します。日程調整の詳細については、各県の国際協力推進員からご連絡いたします。



7/24(木)～25(金)
:プログラム当日

九州各県から集まった生徒と共に、右記プログラムを実施します。2日間全日程にご参加ください。

7月下旬～
:事後学習

例年の参加校はプログラム終了後、学校行事や各地の国際協力・国際交流イベント等で、本プログラムの成果を発表しています。また、JICA九州が実施している開発教育/国際理解教育支援事業の活用や、各県JICAデスクとの連携も推奨しています。

事前に知っておこう!

JICA(ジャイカ)
とは?

JICA(国際協力機構)は、日本政府による開発途上国へのODA(政府開発援助)の中核を担う組織です



JICA
海外協力隊って?

JICAが実施する海外ボランティア派遣制度です。開発途上国で現地の人たちと生活を共にし、貧困や環境など、その国の抱える課題に取り組みます



JICA九州とは?

JICAの九州における国際協力の拠点です。開発途上国から日本の技術を学びに来た人たちのための研修施設もあります



2025年度高校生国際協力実体験プログラム

～世界と出会い、未来を創る一步を踏み出そう！～

事前学習

各県の国際協力推進員が参加校で事前学習を実施します。
 実体験プログラムへの参加前に「国際協力」について国際協力推進員と一緒に考えてみましょう！

プログラム

7/24(木) DAY1

- 11:00 開会式
- 午前 参加校学校紹介 *～ワクワク・ドキドキのファーストプログラムは 自慢のわが校PRタイム！～*
 アイスブレイク *～どんな仲間が参加しているんだろう？ 仲間を知ってチーム力を高めよう～*
- 午後 昼休み
- 体験型ワークショップ *～ワークショップで異文化体験。活動計画づくりのウォーミングアップ！～*
 JICA海外協力隊の活動計画づくり *～JICA海外協力隊になりきって考えてみよう！～*
 JICA研修員との交流会 *～コミュニケーションって言葉だけ？色々な方法で“伝える”をチャレンジ！！～*



7/25(金) DAY2

- 9:00 JICA海外協力隊の活動計画づくり(つづき)
- 午前 活動計画発表 *～協力隊の活動って1つじゃない？ 様々なアイデアが新しい気付きにつながる！～*
- 午後 昼休み
- 振り返り *～2日間で学んだことを振り返り、未来を創る一步を踏み出そう～*
- 閉会式・写真撮影



16:00 解散

※プログラムの内容や時間は変更する場合があります。



事後学習

- 例) ・国際協力出前講座の利用
 ・JICAの研修員交流プログラムの利用
 ・文化祭にて本プログラムの参加体験の発表
 ・プログラムで実施した異文化理解ワークショップを同学年生徒に紹介・実施 など

JICAデスクのご紹介

JICAデスク 福岡



JICAデスク 熊本



JICAデスク 鹿児島



JICAデスク 佐賀



JICAデスク 大分



JICAデスク 長崎



JICAデスク 宮崎



JICA九州 高校生国際協力 実体験プログラム 2025

●グローバル人材を育てる参加型の「学び」

- [世界を知る] 世界の状況や国際協力の現状に気づき、理解を深める
- [SDGsを学ぶ] プログラムを通じ、理解を深め、自分たちが身近にできることを考える
- [交流] 参加者や協力隊経験者、JICA研修員との交流を通じ、国際協力にどう関わることができるかを考える
- [キャリア/生き方] 様々な生き方・経験に触れることで自分自身を見つめなおし、将来の進路選択に役立てる

日程・会場

7月24日(木)～25日(金)
一泊二日

独立行政法人
国際協力機構 九州センター
(JICA九州) www.jica.go.jp/kyushu

福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
(JR鹿児島本線八幡駅下車徒歩10分)
TEL093-671-6311(代表)



参加条件

- SDGs・国際理解教育・持続可能な開発のための教育(ESD)・キャリア教育に積極的に取り組んでいる学校、又は今後取り組む意欲がある学校
- 教員・生徒とも、事前・事後学習を含み、全プログラムに参加可能なこと
- 生徒の保護者より参加への同意が得られること
- 生徒が過去に本プログラムに参加していないこと
- 学校長より参加の許可が得られること

募集数

- 九州7県から7校(九州圏内の国公立、私立の高等学校)
※1校につき、教員1名、生徒4名での参加とします
参加希望校が定数を超えた場合は、応募書類、県のバランス、新規希望校の優先等を考慮して選考します

留意事項

- プログラム参加費自体は無料となります
- 昼食および夕食代は各自でご負担ください。(1日目の夕食は研修員との交流夕食会を予定しています。受付時に夕食代としてお一人1,000円(予定)を各校でまとめてお支払いください)
- 学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します
- お車での来場はできません。公共交通機関をご利用ください
- プログラムへの参加に当たり、参加者全員、国内旅行傷害保険にご加入いただきます。同費用はJICA九州が負担します。万一事故が生じた場合、保険の給付範囲内で補償いたします
- 宿泊先はJICA九州宿泊棟となります
- 動きやすい衣服での参加をお願いします
- 個人都合(部活等)によるキャンセルはご遠慮ください
- 筆記用具、健康保険証の写し、および緊急時の連絡先をご持参ください

応募方法

右記QRコード又はURLから、JICA九州ホームページ内
高校生国際協力実体験プログラムのページをご確認いただき、
以下の手順でお申込みください。

- ① 応募用紙をダウンロードし入力
- ② 応募フォームのリンクをクリックし、必要情報を入力後、応募用紙をアップロードして送信

応募フォーム



応募締切 2025年5月19日(月)

2025年6月17日(火)までにメールにて選考結果通知

問合せ先

〒805-8505
福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1 JICA九州センター内
(特活)九州海外協力協会
MAIL: kaihatsukyoiku@npo-kyushu.or.jp
TEL: 093-671-8678 / FAX: 093-671-0979

2024年度参加校実績

福岡県	久留米高等学校	大分県	大分舞鶴高等学校
佐賀県	佐賀龍谷学園 龍谷中学校・高等学校	宮崎県	宮崎大宮高等学校
長崎県	長崎南山学園 長崎南山中学校・長崎南山高等学校	鹿児島県	原田学園 鹿児島情報高等学校
熊本県	尚綱学園 尚綱中学校・尚綱高等学校		

JICA 九州高校生国際協力実体験プログラム応募用紙

ふりがな			
高等学校名	立	高等学校	
学校住所	〒		
	TEL		FAX

引 率 教 師	ふりがな		担当		
	氏名		教科		
	連絡先	引率者の電話番号※緊急連絡時等に使用いたします。			
		引率者のメールアドレス※合否通知等に使用いたします。			
生徒1	ふりがな		学年		
	氏名		年生		
生徒2	ふりがな		学年		
	氏名		年生		
生徒3	ふりがな		学年		
	氏名		年生		
生徒4	ふりがな		学年		
	氏名		年生		

上記の者が、JICA 九州の「高校生国際協力実体験プログラム」に参加することを承認します。				
高等学校名		日時	2025年	月 日
学校長				印

【個人情報の取り扱いについて】

参加のお申し込みについて入手しました個人情報は、本プログラム実施に係る業務のみに使用いたします。また、当該情報は当機構にて厳重に管理し、正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することは一切ありません。

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1 JICA 九州内 (特活)九州海外協力協会

(4) (過去に本プログラムに参加されたことのある学校のみお答えください。)

プログラム参加後、開発教育/国際理解教育促進のために学校としてどのような取り組みをされてきましたか？

(5) これまでに JICA の開発教育支援事業を活用されたことはありますか？

※活用されたことのある事業の口を■に塗りつぶし、詳細を本文に記載してください。

国際協力出前講座 センター訪問 JICA 研修員との交流プログラム

高校生国際協力実体験プログラム 教師海外研修 開発教育指導者研修

国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

(生徒保護者用)

参加申込書

独立行政法人 国際協力機構

九州センター 所長 殿

独立行政法人国際協力機構 九州センター主催「高校生国際協力実体験プログラム」の募集要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。

年 月 日

申込者氏名 : _____

生年月日 : _____ 年 _____ 月 _____ 日 年齢: _____ 歳

親権者または

保護者名 : _____ (印)

本人との続柄 : _____

【参加にあたり心配事がある方はご記入ください（健康面、アレルギー等）】

以上



2025 年度（令和 7 年度）

JICA 九州 高校生国際協力実体験プログラム

発行 2026 年 2 月

【発行者】

独立行政法人国際協力機構 九州センター（JICA 九州）

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1

TEL 093-671-6311

<https://www.jica.go.jp/kyushu/>

【事業受託者】

特定非営利活動法人 九州海外協力協会

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1（JICA 九州内）

TEL 093-671-8678